

九州における和牛の経営的性格について

第 1 報 (概 要)

川 関 巖

九州農業試験場

KAWASEKI, I. Farm-economical Character of the Japanese
Brown Cattle in Kyusyu. I. (Summary).

1. ま え が き

私達はさきに九州における和牛の重要性及び飼養概況について統計資料に基づいて種種の検討を加え(第1報), 引続き褐牛について逐次4ヶ所の現地調査(第

2~第5報)を実施して来た。もとよりこの調査は未完結であるが現在までの成績を取りまとめて九州にお

九州農試研究資料第7号。九州の和牛に関する統計的概観・九州農業研究 12~16 九州和牛に関する研究第1~第5報参照ありたい

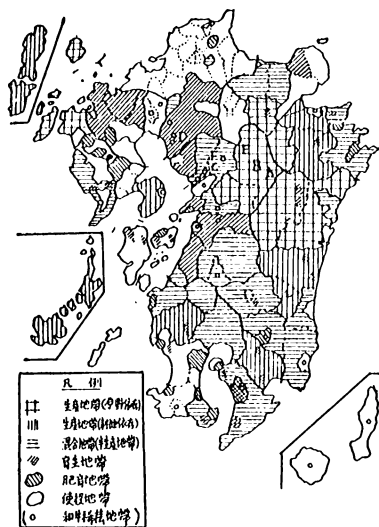
ける褐牛の経営的性格について主として技術面から比較考察し経営改善上の問題点に若干触れて見たい、

飼養の目的によつて飼養形態を分け、25年センサス資料により郡段階において大づかみにその地理的分布を見たのが第1図である、

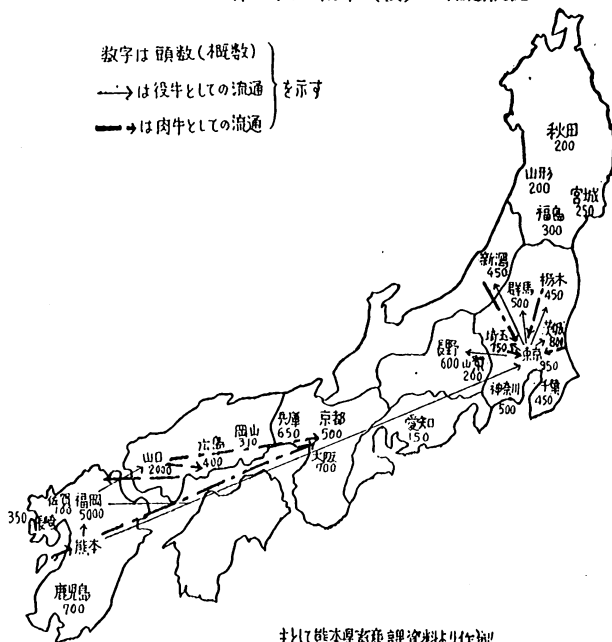
2. 九州における和牛飼養の地域性

第1図 九州における和牛飼養の地域性

(昭和25年現在)



第2図 褐牛(犏)の流通概況



主として熊本県畜産課資料より作成

この飼養地帯別に近年の飼養と生産の推移を見ると、原野を基盤とする生産地帯については飼養、生産ともにむしろ停滞的であり、生産頭数の増加は耕地を基盤とする生産地帯に著しく、飼養頭数の増加はこの両者以外の地帯、特に戦後において混合地帯に著しく認められる。(この地帯は一般には準生産地帯と呼ばれる様であるが、混合地帯という方が郡単位の実態をよく表すように思われる。)つまり和牛の飼養及び生産の立地が山地から平地へ伸びて来て大いに拡大されたわけであるが、この混合地帯は郡単位に見れば和牛地帯として未だまとも安定したものとはいえず、今後の和牛のあり方が特に注目され多くの問題を妊んでいると思われる。

なお褐牛については戦後関東、東北地方での飼養及び生産の進展が著しく認められる。

3. 褐牛の生産、流通の概況

昭和28年熊本県において、成牝牛約50,000頭、生産犏約28,000頭(何れも約10%の黒牛を含む)。生産

率は56%、犏の商品化率は79%である。蕃殖牝牛は10ヶ年更新とせられ毎年約5,000頭が更新される。同年の年下犏市場入場頭数は約28,000頭*で、その約1/4は売買成立せず畜主取となりその多くは自家または地元保留され蕃殖牝牛更新用に充てられる。市場取引の成立した約22,000頭のうち約半数は直接県外へ移出される。移出先別頭数及び流通経路は第2図の通りである。残りの半数のうち約8,000頭は県内の育成地及び福岡県下において1年~2、3年育成された後、一部は蕃殖用として生産地へ還元されるが、大部分のものは山口県等で飼育された後京阪神市場へ出るか、或いは直接芝浦市場へ送られ、ここで出荷された屠殺牛と引換えにその後牛として茨城、埼玉、栃木、新潟等の諸県の農家に渡され、2~3年飼育されて最後に短期肥育を行い芝浦屠場へ戻るものが多い。以上のように褐牛は筑後地区と東京を中継市場として役用を主として全国各地へ流通し大部分は数年のうちに肉用に供

* 農林省畜産局：家畜の流通過程に関する調査、第3輯和牛の流通過程。4. 熊本県 昭29.3

されるものである。今後肉牛としての価値を再検討し大衆向の肉を安く生産するよう資質改良、飼養技術、流通事情の改善対策が肝要であろう。

この全国的な流通過程に因与するのは主として筑後地区の家畜商数社と東京にある全国畜産株式会社の様であり、生産地の家畜商は農兼業のごく零細なものが殆んどである。

4 調査方法及び調査対象

現地調査はA, B, C, D4ヶ所について27年秋から30年春までに逐次行つたもので、部落調査及び抽出農家の聴取調査によつた。

調査部落の概況を第1表に示した。

第1表 調査部落の概況

調査箇所別		阿蘇郡 野屋村 A	阿蘇郡 白水村 B	菊池郡 西合志村 C	八女郡 光友村 D
土地 利用 平均 状況	田	—	1.8	2.6	3.5
	畑	27.1	23.4	4.0	1.4
	耕地	27.1	25.2	6.6	4.9
	山林	6.8	4.5	1.9	1.5
	私有原野	38.4	2.5	—	—
共有原野	—	12.2	—	—	
農家 戸数	総戸数	31	29	48	51
	褐牛飼養戸数	31	29	11	26
	馬	—	—	15	2
	大家畜を飼わぬもの	—	—	22	23
調査時期		29年秋	28年秋	27年秋	30年春

A, Bは原野依存の生産地帯, Cは混合地帯, Dは育成地帯に属し、夫々の飼養型態の特徴をよく代表していると思われる。Aは純畑作地帯, B及びCは畑勝ちの地帯, Dは水田地帯に属し、Aは私有原野, Bは共有原野を主とする点対照的である。A, Bは旧来の生産中核地で全戸褐牛を飼養するに対し、Cは元来馬産地で褐牛の導入は戦後に始まり、Dは大正初年以來馬から牛の育成に變つたものである。

抽出調査農家のうちから経営の経済的規模がなるべく近似しており、夫々の地帯の農業の性格をよく表していると思われるもの各1戸を事例農家に選んだ。事例農家については、A, Bが広い畑地をもち、Aは広大な私有原野を有する点、Aの成牛4頭のうち2頭は小作牛である点及びA, Bにおいて玉蜀黍、菜種の作付の著しく多い点を注目したい。

褐牛の飼養概況を第2表に掲げた。1戸当頭数はA 3・7頭, B 2・6頭, C, Dは1頭であり経営内における褐牛の役割の大小をうかがい得る。牛の資質を総頭数に対する登録牛の割合で見れば、県下随一を誇るBは登録牛が33%を占めており、Aは22%でなお相当の遜色を認める。Cは27年秋には未だ登録に対する関心薄く調査困難であつた。Dは登録検査適令期前後に育成上りとして販売されるため正確な調査が出来なかつたが、ここではむしろ性別に去勢牛が大半を占める点が注目される。牛の所有関係を見ると、小作牛の総頭数に対する割合がA 22%, B 4%, C 33%を占め、牛小作が相当広く行われていることがうかがわれる。

牛の資質の良否及び所有関係は直接飼養農家の収入に影響するもので今後の経営上の問題点である。

第2表 褐牛の飼養概況

調査箇所別	A	B	C	D
調査戸数	16	29	11	26
成牝牛頭数	59	75	12	26
成牝牛1戸当頭数	3.7	2.6	1.1	育成牛 1.0
登録牛の割合%	22	33	?	去勢牛 54
小作牛の割合%	22	4	33	—

5 褐牛の経営的性格

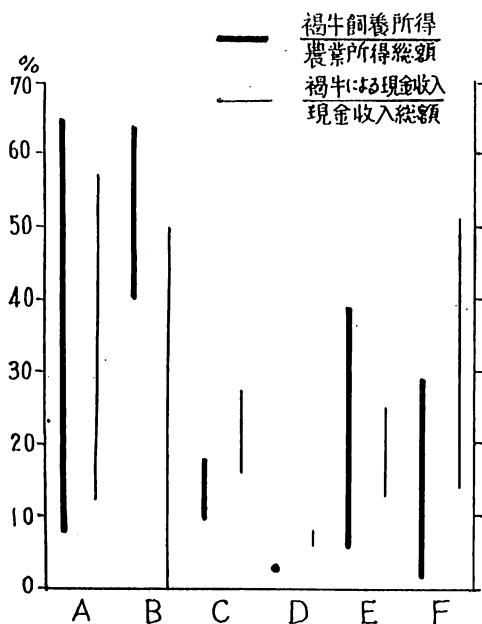
農業経営において褐牛を飼養する目的は畜産物、畜力、肥料の獲得にある。逐次検討して行こう。

1) 畜産物の獲得

褐牛も仔畜及び肉等の畜産物の獲得による用畜の性格を多分に有する。先づ生産率、育成率及び犢の商品化率を見よう。生産率はA 74%, B 55%, C 37%, D 0を示し、調査年次の相異を考慮に入れてもAが特に優れているが、これは主として豊富な私有原野に負う所であろう。Cでは生産率の向上が急務である。Dにおける育成期間は1ヶ年が普通であるが、年2回出し入れするものも往々認められ育成率は119%となっている。A, Bの育成率は自家保留の犢の育成であり夫々19%, 17%を示す。犢の商品化率はC, D 100%であるが、A, Bにおいては80%, 82%となっている。

この仔畜の生産及び販売による褐牛飼養所得の農業経営における比重を第3図に見よう。

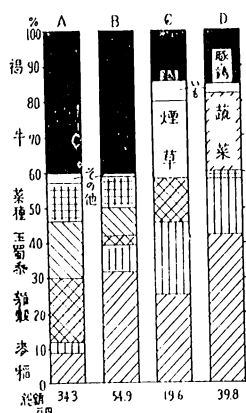
第3図 収入から見た褐牛の比重抽出農家の成績



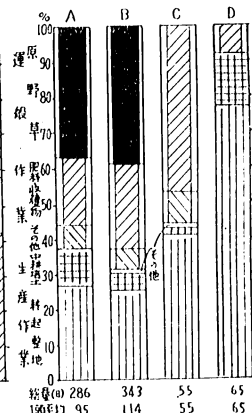
先づ農業所得総額に占める褐牛飼養所得の割合は、Aは8~64%と巾広く、Bは40~64%、C 9~18%、Dは2~3%に過ぎない。同じく現金収入の割合はA 12~57%、B 0~50%と巾広くC 15~27%、Dでは5~7%である。Aにおいて飼養所得、現金収入ともに著しく低率のものは小作牛で糞の販売額の1/4だけを所得とし増殖額は見積らないためである。Bの現金収入0というのは糞の生産はあつたが年内に販売しなかつたものである。参考としてEに井芹氏*による阿蘇郡水田地帯(永水村)の調査成績を掲げたが、農業所得において6~39%、現金収入において13~25%に過ぎず、知地帯のA、Bに比し褐牛の比重は著しく低い。またFに吉田氏**による泗水村(Cの隣村)の酪農調査成績を掲げたが、農業所得において1~29%、現金収入において14~51%を示し、A、Bにおける所得面からの褐牛の比重の大きさが明かになる。

次に農業粗所得(家計仕向現物を含む)の部門別割合を事例農家について見れば第4図の通りである。A、Bにおいては褐牛所得が40%を占めて断然首位

第4図 粗所得の部門別割合 事例農家



第5図 作業別畜力利用状況 事例農家



にあるが、そのうち増殖所得がAでは90%、Bでは70%を占めている。これに次ぐものはAでは雑穀、玉蜀黍、菜種であり、Bでは稲、菜種、玉蜀黍の順である。Cでは褐牛所得は12%を示し稲、麦、煙草に次ぎ雑穀と並んで第4位を占める。Dでは褐牛所得は5%に過ぎず稲、野菜、麦及び養豚、養鶏所得等に支えられた多彩な経営内での比重は甚だ軽い。以上要するに仔牛の生産による畜産物の獲得の効果はA、Bにおいて特に著しく乳牛にも優るものがある。

2) 畜力の獲得

畜力の獲得利用状況を第5図で見よう。

総量においてはA 286日、B 343日、C 55日、D 65日と著しい差が見られるが、これは延作付面積がC、Dに比べてAが2.5倍、Bが3倍に上る点を先づ考えねばならない。なおA、Bにおいては3~4頭の牛を必ずしも平均に使役せず若干の駄載を課するだけで殆んど蕃殖専用と見られるものもあるが、仮りに1頭平均の使役日数で比較して見るとA 95日、B 114日となりやはりC、Dより甚しく多くなる。生産作業と運搬作業に分けて作業別の利用日数を見ると、運搬作業の割合はA 63%、B 69%、C 56%であるがDは僅かに8%に過ぎず運搬は殆んど人力によつており原野草運搬が約40%を占め、平地に比べてこの分だけが余分の形となつている。

作物別の利用状況を見れば(図省略)A、Bでは玉蜀黍、菜種が50~60%を占め中耕培土にも利用して労働節約的に大面積栽培を可能にしている。C、Dで

* 井行 徹：阿蘇玉蜀黍の経営的性格——第4回農業経営研究会発表内容抄録(改良局)

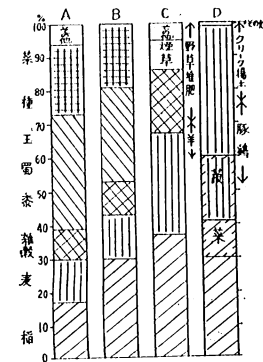
** 吉田武夫：乳價と酪農経営——熊本市周辺生産地帯について——第5回農業経営研究会発表内容抄録(改良局)

は稲、麦が主であるが、Dにおいては若令牛にも拘らず蔬菜の中耕培土にもかなり利用しているが、これに反してCにおいては更に多角的な利用が望ましい。

3) 肥料の獲得

堆厩肥の獲得利用状況を見れば第6図の通り、聴取によれば総施用量はA 6,200貫、B 7,000貫、C 4,600貫、D 4,200貫である。一方生産量を獲得した堆厩肥材料から概算するとA 6,700貫、B 8,400貫、C 3,200貫、D 4,100貫となるが、C、Dは施用量、生産量ともかなり過大に感ぜられる。一般に成牛馬の腐熟厩肥生産量は1頭当り2,000貫程度とせられており、C、Dでは如何なる手段によつてこれだけの堆厩肥を生産しているかが先づ問題となる。Cでは羊1頭を飼養しており別に人糞尿利用の野草堆肥を準備し、Dでは豚、鶏の飼養とクリークの揚土の利用によつて補充されている。施用量をごく大ざつぱながら延作付面積1反当りについて比較すれば、A 150貫、B 120貫、C 220貫、D 300貫となり、A、Bの甚だ僅少なのに驚かされる。作物別の施用状況を見るとAでは稲、麦に30%、玉蜀黍、菜種55%、Bでは稲、麦40%、玉蜀黍、菜種50%、Cでは稲、麦に70%、Dでは稲、麦と蔬菜に殆んど全部を施用しており、夫々主要作物に大部分が利用されている。

第6図 堆厩肥の獲得施用状況 事例農家



総施用量	6,200	7,000	4,600	4,200	粗飼料総量	2,200	1,900	2,150	915
総生産量	6,700	8,400	3,200	4,100	T, D, N, 総量	418	432	551	317
反当り施用量	150	120	220	300					

要するに肥料獲得の性能は牝牛1頭当りには大差ない筈であるから、A、Bでは過少な堆厩肥の肥効増進的な堆厩肥貯蔵が問題であり、C、Dでは経営全体から見

て最も合理的な補充手段が問題であり、更にA、Bについては飼肥料作を加味しに地力維持的な作付方式の研究が肝要と思われる。

4) 飼料構造

最後に各地帯における飼料構造を観察しよう。第7図に示すように塩とDにおける麩の購入を除いてすべて自給物に依存している。先づ1頭当りの粗飼料総量及びT、D、N。総量を比較すると、Dは夫々1/2、3/4程度で足り、これが土質等の条件に恵まれたDにおいて旧来育成牛馬を役畜とする主要因であろう。T、D、N。による飼料の構成割合を見ると、原野草がA 57% B 30%を占め、Bについては更に原野草飼料化が望ましい。(第4報に詳論した)Cでは非酢草が44%を占めるが、Dはバッチオン剤散布の影響で8%に過ぎず蔬菜厨が若干これを補っている。藁類の比重はA、B、Cは何れも40%程度であり、Dは50%に上る。主産物としては玉蜀黍がA 5%、B 20%、麦がDに6%、大豆がBに2%、甘藷がB、C各々1%を占めているが、これらの現金化可能な品目及び購入品目の節約が先づ問題となろう。青刈類は玉蜀黍をBで3%、Cで0.8%、Aでは育成用だけに利用している現況だが、サイロの活用及び各種青刈飼料作の研究が主産物の節約及び地力維持の点からA、Bにおいて特に必要であろう。

以上何れも殆んど自給飼料に依存しているといえ、内容的に見ればA、Bは原野と玉蜀黍に強く依存し、Cは非酢草と耕種副産物を主体とし、Dは耕種副産物と糠麩の購入に依存しており、夫々立地条件に即したあり方ではあるが、なお種々改善の余地を認め得る。

6. 要 約

九州における和牛の飼養立地は漸次拡大せられる傾向が認められるが、何れの飼養型態の地帯においても概して和牛は兼用的性格を有している。しかし夫々の飼養地帯によつて何れの性格が主となり従となるか、各性格の軽重の度合を大いに異にしている。

1) A、Bの生産地帯では乳牛に劣らぬ収入を獲得する用畜としてまた農作業用役畜及び運搬用駄畜として飼養されている。なお所得、農作業、地力維持の点で畑作との関連が極めて緊密である。

2) Cの混合地帯では馬産に代る収入を上げる用畜としてまた、より経済的な役畜として飼養され、一応小農経営の合理化に寄与している。

3) Dの育成地帯では収入の伴わぬ役畜としては極力費用節約を目指して耕種容易な軽鬆土という自然条件を活用して犢の育成兼使役を行つている。

4) 肥料の獲得について1頭当りの性能には地帯により大差はない筈であるから、生産地帯では堆厩肥の堆積貯蔵方法について、混合地帯及び育成地帯では堆厩肥の不足分の補充手段について主として問題が存在する。